様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３１日現在

機関番号：１２６０８
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：22650143
研究課題名（和文）　体験の質から見た大学一般体育受講学生の負の遺産と教員の心理的疲弊に関する研究
研究課題名（英文）　Research on university physical education and sports class students' negative inheritances about the past experiences and university physical education and sports teachers' mental exhaustions
研究代表者
石川　国広（ISHIKAWA　KUNIHIRO）
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・助教
研究者番号：10212838

研究成果の概要（和文）：小学校から高校までの体育の授業に対して、ネガティブな印象を持つ学生が２～３割程度おり、教員の教え方が「指示命令・威圧的」と捉えている者が約４～６割、「自由・放任的」が約２割～４割いて特に高校で多かった。ポジティブな印象を持つ者も、高校で約５割以上が「自由・放任的」と捉えていた。大学一般体育授業の質の向上を図るには、学生の背景の事前調査と授業実践支援ツールの開発など、教員の創意工夫と丁寧な授業作りが必要だと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The preliminary survey was conducted to investigate students' impressions regarding the physical education class that students have been experienced between elementary school, junior high school to senior high school level. The result indicated that there are 20 to 30 percent of the student expressed negative impressions toward lessons. Of that population, approximately 40 to 60 percent of them expressed teachers' teaching style was directive, injunctive and coercive toward learners. Furthermore, for about 20 to 40 percent of them had impression toward teachers' teaching method was free and hand off policy. Those outcomes were strongly expressed during senior high school stage. Of those 50 percent or above students with positive impressions also indicated teachers' teaching methods were free and hand-off policy as well. In order to improve the quality of physical education and sports classes in university level, developing the preliminary questionnaires have a crucial role and it will become a supportive tool to improve to make the class meaningful for them, and moreover, it will help teachers and instructors to be more creative to provide valuable lessons for students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,300,000	0	1,300,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			0
年度			0
総　計	2,900,000	480,000	3,380,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学
キーワード：運動指導論

１．研究開始当初の背景

国の内外、および心理学や生理学等の領域に限らず、体育・スポーツが人間に及ぼすポジティブな影響に関する研究は、これまで数限りなく発表されてきている。

近年では、日本が少子高齢化社会に突入していく将来予測とも相まって、中高年者が健康で生き甲斐のある生活をいかに生涯にわたって送るかという視点からも、体育やスポーツが持つ意義や価値が再認識されてきていることは紛れもない事実と言えよう。

しかし一方で、社会に出る最終局面とも言える大学生の「一般体育」授業における受講態度は、芳しいという話はほとんど聴かない。「やる気が感じられない」「遊びだと勘違いしている」「良い点が取れそうで、専門を決める際の平均点を押し上げるために有効だから受講しているだけ」等々、ネガティブな会話は、教員同士で日常的に交わされ、教員が授業実践に腐心し、心理的な意味で疲弊している様子が見て取れる。

このギャップは、一体どこから来るのだろうか。効果や意義が声高に叫ばれているにもかかわらず、高等教育機関である大学での学生の科目に対する意識の低さ、そして理解の貧困さ‥‥。

もちろん、若いが故に健康をことさらに意識する年代ではないことも背景としてあるだろう。また、大学の卒業単位の中での位置付けや、施設・用具の充実度の問題、指導する教員の指導力不足なども、学生の受講の様子に影響を及ぼしていることは容易に想像できよう。

しかし、研究代表者の長年の授業実践から、それらのみが主な要因とは、言えそうにない現実が潜んでいそうである。

このような素朴な疑問・問題意識から、研究代表者が授業を担当している本務先や非常勤先の学生を対象として、小学校から高校までの体育の授業における体験の質、クラブ活動での体験の質、および対人関係における体験の質に関する調査をパイロットスタディとして行ってきた。

その結果、体育・スポーツの学習場面や過去の対人関係で、ポジティブな体験をたくさん有している学生ほど大学一般体育の受講態度は意欲的であり、そうでない学生ほど逆の、あるいは最低限度の単位のために、といった後ろ向きな受講の様子がうかがわれた。

そこで本研究では、研究代表者が専門とする体験教育やスポーツ精神医学、カウンセリング心理学の中でも、特に認知行動療法の知見を活用し、大学一般体育受講学生を対象として、これまでの体育・スポーツ授業での体験や一般的な意味での対人関係等の質を明らかにし、体育の受講に対して意欲的になれない背景について、「過去の体験」からくる「認知の歪み」という視点から検討を行う。

また、授業を指導する教員を対象として、授業をするにあたってのストレスや疲弊の度合いについて調査を実施する。

さらに、それらを付き合わせることで、教員と学生相互の関係性がなぜ豊かにならないのか、授業が学生に軽視され、教員がストレスを感じる授業実践とならざるを得ないのかについて、総合的な考察を加える。

先にも述べたように、体育・スポーツに関する研究では、それらに関わる研究者によるポジティブな研究成果の公表が圧倒的に多い。しかし、現実問題としては、本質的に意義や意味のある教材であるにもかかわらず、大学教育で軽視されているという実態は否めず、その背景について「体験の質」に注目して、学生側と教員側から分析を行った例は見当たらず、そこが本研究の特色および独創的な点と言えよう。

本研究で期待される成果としては、教員の学生理解が深まって、より良い授業実践を行う一助となることはもちろん、ひいては体験的に学ぶ教育手法の意義が再認識されることに繋がっていくものと考えられる。

２．研究の目的

まず、大学一般体育受講学生が、小学校から高校までに受けてきた体育授業での体験の概要を把握して、「負の遺産」とでも呼ぶべきネガティブ体験について「体験の質」という観点から検討すること。

また、学生を指導する担当教員の「疲弊」について調査を行い、「負の遺産」と教員の「疲弊」との関連性を明らかにすること。

さらには、それらの結果を踏まえて、教員は、創意工夫を前提としつつ、どのようなツール等を作成・開発して授業を展開すれば、より深い学びにつながる可能性が高いのかについて、実践事例を基にして考察し、提言を行うこと。以上、３点を目的とする。

３．研究の方法

まず、大学一般体育受講学生の小学校から高校までの体育の授業の概要と「負の遺産」について把握するために、授業での実践経験が豊富な教員の知見を基にして、調査用紙の改善を繰り返し、完成版の開発を目指した。

教員の「疲弊」については、指導経験が豊富で、特に複数以上の大学の実態やカリキュラム、学生の振る舞い等について詳しい教員を対象として、インタビュー調査等を適宜実施した。

数量的データに関しては、一般的な統計処理をし、テキストデータに関しては、テキストマイニングソフトを活用して解析を行った。

また、教員からのインタビュー調査等に関しては、適宜記録を残しつつ、分析されたデータ結果に対する考察や、授業実践の中で起

こりうる現象の背景等の理解、さらには総合的な提言をまとまる際の多様な視点の必要性を研究代表者が認識するために有効利用した。

４．研究成果

学生の背景にある体験の質を把握するために、体育授業の背景調査（PEBQ：Physical Educational Background Questionnaire）および体験からの学び調査（LEQ：Learning by Experiences Questionnaire）の２種類のオリジナルの調査用紙の暫定版をまず作成した。

その結果、約２～３割程度の学生が小学校から高校までの体育の授業に対してネガティブな印象を持っており、特に中学校での印象があまり良くない傾向にあった。

印象が良くない全般的な理由としては、「教員の厳しさ」「画一的で命令的な指導」「上手な人が中心になりがち」「他人との比較」「放任的で適当な授業」などのキーワードがあげられていた。

この時期は、体力的な要素以外にも自尊感情を高めたり、コミュニケーション能力を向上させるような働きかけが重要なはずだが、むしろ体育の授業がマイナスに作用している可能性もあることが推察された。

一方で、ポジティブな印象を持つ者の理由としては、「遊び感覚」「試合ばかりだった」「勉強の中の息抜き」「自由放任で楽しかった」等の記述があり、不的確な指導や不十分な内容の授業が存在する様子がうかがわれ、こういった体験の積み重ねが、大学での体育の授業軽視につながる可能性も考えられ、負の遺産として捉え直すことの意義が再確認された。

教員に対しては、インタビュー形式で現状把握を中心に行った。その結果、各大学ごとに体育の授業の位置づけや形態にかなり幅があることがわかった。

今後、教員の心理的疲弊について研究を進めて行くにあたっては、必修単位としての授業を担当していることや、授業の運営形態、1 クラスあたりの学生の数や施設との関係など、ある程度の条件を考慮して対象を選定し、継続して調査を実施して行く必要があるものと考えられる。

２年目は、被験者の数を増やしてデータの安定性を高めるべく、継続してデータ収集にあたった。

その結果、小学校から高校まで各時期での体育授業に対して、ネガティブな印象を持っている学生は、やはり約２～３割程度存在し、「運動が得意でない」「苦手」「先生が嫌い」「いじめが横行」等の背景が潜んでいることがうかがわれた。

それらの学生に特徴的なのは、教員の教え方が「指示命令・威圧的」と捉えている割合が約４～６割と非常に高く、ポジティブな印象を持っている者の約２～３倍と高い値を示し、「やらされている感じ」「画一的」「規則・規律重視」などの理由が記されていた。

次に割合の高い教え方は、「自由・放任的」で、特に高校でその傾向が強く、「指導がない」「いい加減」「放任過ぎて無意味」「暇つぶし」等の受け取り方をしている者さえいた。

この傾向は、ポジティブな印象を持っている者にも多く、高校では約５割以上が「自由・放任的」と捉えており、「受験の息抜き」「気分転換」「遊び」等の記述が目立った。

一方で教え方が「主体性尊重・支援的」と捉えている者は、より好意的な受け止め方をしており、「丁寧な指導」「頑張りの評価」「内容の面白さ」「生徒が計画」「ストレス発散」などが理由として上がっていた。

教員の疲弊については、「話を聞いて理解し主体的に動くこと」や「周囲と関わって関係性を作ること」「授業運営に協力的なこと」等、大学生として当然期待したいことが出来るか否かが影響していることがうかがわれ、学生側の過去の体験を踏まえた理解と同時に、授業での指導スタイルや内容を再考し、学生の潜在的な力を引き出すような授業展開について、教員が柔軟に対応する必要があるものと推察された。

最終年度では、これまで適宜マイナーチェンジをして、暫定版を改善してきた体育授業の背景調査（PEBQ）、および体験からの学び調査（LEQ）について、微修正を行って完成版とした。

PEBQおよびLEQの活用方法は、授業がスタートする各学期の当初に学生に協力を依頼して回収することよって、学生の背景にある体験の質の把握が容易となり、教員が担当するクラス全体の傾向に加えて、個人の背景についても掘り下げることが可能となった。

また、授業実践を繰り返していく中で、過去の体験が現在の行動に影響を及ぼしていると考えられそうな場面に出くわした際には、改めてPEBQやLEQを参照することで、教員の学生への理解が深まることが可能になるものと思われる。

次に、「負の遺産」と教員の「疲弊」についてであるが、相互に関連性が認められ、過去の体育・スポーツ体験の質が低い学生の授業での取り組みや行動・言動から、担当教員はかなりのストレスを感じ、その打開策が見出せなかったり、状況を共有して共感したりサポートしてくれる教員や仲間が乏しかったりすると、結果としてかなりの疲弊状態に陥る可能性があることがわかった。

また、「負の遺産」の延長線上にある現在の学生の振る舞いから、教員の意欲が下がり、結果として授業の質の低下や、教員と学生の関係の悪化等が予想された。

研究代表者のこれまでの授業実践から、学生にとっての授業での学びを促進させるためのツールとして、PDCA サイクルを学習の基盤においた持続可能な自己能力開発用紙（SSDS：Sustainable Self Development Sheet）を継続的に授業で使用してきた。本研究における PEBQ や LEQ での調査および考察をもとにして微修正を加えて試行錯誤した結果、ひとまず完成版と呼べる SSDS が出来上がった。

この SSDS は、活用を繰り返すことによって PDCA サイクルの考え方の定着や、理解の深化が期待できるが、教員側からすれば、根拠に基づいた学生の状況把握が可能となり、また学生相互の関係性の促進や、教員と学生のコミュンケーションの活性化にも好循環をもたらし、役立つことがわかった。

結論として、授業全体の質の向上を継続的に図って行くためには、教員が自分の授業の方針や指針をより明確化・一般化することがファーストステップであり、授業が深化していくプロセスをより着実に刻んで行けるように、学生の背景要因を理解するための調査用紙の開発や、学生が授業実践を継続して記録できるツールの開発等を心がけることが望ましいと考えられる。

また「体験型の学習形態」をとる体育の授業では、柔軟な授業プログラムの導入が可能なため、例えば、動画撮影が可能な IT 機器や身体情報計測機器などを活用したり、授業内容やデモンストレーション等の聞き漏らし、プレーイメージの乏しさ等を補うために、DVD 付きの教科書を学生に購入させる等々、教員が創意工夫に溢れたアイディアを持つことと、ある程度の時間をかけた授業準備や振り返りを繰り返すなど、丁寧な授業作りが必要であると考えられる。

本研究では、「負の遺産」や「疲弊」というネガティブなキーワードを敢えて出発点としたが、今後の課題としては、スポーツを愛好し、生涯の友としている世間一般の人々が感じている魅力や可能性について改めて把握し、それを大学一般体育授業の限られた枠組みの中にどう取り入れ、どこまで伝えて学生に理解させるべきなのか等について精査・検討を加える必要がある。

また、旧態依然としたスポーツ種目名での授業の開講から、何を目指してその種目を活用するのかが、より具体的に学生に伝わるような授業名改善の工夫が必要であろう。同時に、昨今では、開示することが当然となっているシラバスを充実させ、その時々の思いつきや場当たり的な授業内容から脱却して、授業目標の達成に向けた具体的なロードマップのイメージを学生と教員が共有できるような、システマティックで緻密な計画を立てることが重要である。また、SSDS のような授業の記録用紙を使って、学生の声に耳を傾けながら授業実践を繰り返し、FD の実施等によって個別の教員の視野広げて行く必要があるものと考えられる。

さらには、学内外のスポーツ施設や部活動・サークル、地域サービス等の紹介など、総合的な学生の支援が、大学一般体育の充実と一般社会をも含めた体育・スポーツの認知度の向上に繋がるものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
石川　国広（ISHIKAWA　KUNIHIRO）
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・助 教
研究者番号：10212838

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし